様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１６８２６

研究課題名（和文）第二次世界大戦の終結と戦後秩序の形成-宮中グループの「戦前」と「戦後」-

研究課題名（英文）The End of the Second World War and the Formation of the Postwar Order

研究代表者
鈴木　多聞（SUZUKI, TAMON）

京都大学・白眉センター・特定准教授

研究者番号：７０６３６２１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：戦前から戦後にかけての昭和天皇と宮中を重点的にとりあげ、戦争終結のタイミングや条件の問題と戦後秩序の見通しの問題を明かにした。諸外国での文書館で史料調査を行い、史料を収集することができた。また、『昭和天皇実録』をカレンダー化し、時間の流れを整理することができた。研究成果の一部はすでに「『聖断』 と『終戦』の政治過程」（筒井清忠編『昭和史講義 最新研究てみる戦争への道』（筑摩書房、2015 年）「鈴木貫太郎と日本の『終戦』」（黄自進・劉建輝・戸部良一編『「日中戦争」とは何だったのか』ミネルヴァ書房、2017年）として発表している。

研究成果の概要（英文）：This research focuses on Emperor Hirohito and his court during and after the Second World War. It clarifies their views of the terms and time frame of the surrender, as well as their perceived prospects for the postwar order. During the term of the grant, I collected historical materials from several archives overseas. I also collated the complicated sequence of events described in Showa Tenno Jitsuroku into a readily comprehensible calendar format.

研究分野：日本近代史

キーワード：終戦　天皇　宮中　昭和天皇実録　鈴木貫太郎

１．研究開始当初の背景

戦争の終結過程において、政治指導者が軍事から外交に軸足を移すときのメカニズムは不明な部分が多い。また、同時に、このような「戦前」の戦争終結過程が「戦後」の政治にどのような影響を及ぼすのかも不明瞭である。2014 年に『昭和天皇実録』が公開され、一日一日の昭和天皇の行動記録が明らかになったことにより、従来とは違ったアプローチでの研究が可能となった。

２．研究の目的

昭和天皇と宮中勢力の「戦前」から「戦後」にかけての動きを明らかにする。『昭和天皇実録』の公開により、昭和天皇の発言や宮中グループの動きを時間的な前後関係の中でとらえることが可能となった。

すなわち、切迫した状況の中では、現在からみれば取るに足らない出来事であっても、当時者にとっては重大な出来事のように感じられた可能性がある。あるいは逆に、現在からみて重大な出来事が当事者にとっては取るに足らない出来事と感じられた可能性もある。

現在の研究者は結果を知っているため、結果から遡及して理解しやすいが、当事者は、その当時の局面ごとに判断をせまられていたのである。

３．研究の方法

研究期間内において、昭和天皇だけではなく、宮中関係者の史料を重点的に収集した。『昭和天皇実録』の出典にあがっている本や雑誌だけではなく、『昭和天皇実録』に登場する個人名をキーワードに、様々な検索システムから史料情報を収集した。

『昭和天皇実録』に書かれている拝謁時間（開始から終了時間）のカレンダー化とデーターベース化を行った。可能な限り、より詳細な時間に関する情報を蓄積した。ただし、史料によっては、時間情報が異なることが多かった。

『昭和天皇実録』には拝謁の終了時間が書かれていないことが多かったので、有益であった。空襲警報、警戒警報の時間についても調査を行ったところ、これら警報が様々な点で政策の形成過程に影響が出ていたことが判明した。

さらには、『昭和天皇実録』には、昭和天皇が当時、内外からどのように見られていたのかという視点が少なく、そのような観点からも史料を収集した。研究成果の一部は、近日中に著書として出版を予定している。

４．研究成果

（１）「第二次世界大戦の和平交渉とスイス」(第 1 回日瑞学術交流ワークショップ、軽井沢町中央公民館、2015 年 8 月 22 日)と題して報告を行った。

本報告の中では、大本営の移動問題と貞明皇太后の疎開問題について取り上げた。その中で、貞明皇太后の軽井沢への移動の日程についても指摘した。

7 月 27 日の段階で「皇太后陛下来る八月十日より十五日頃迄の間に概ね左記御発着割に依り軽井沢へ行啓当分の間御滞留被為在御予定」（警保局警務発甲第 97 号）という史料が残っている。また、8 月 3 日、東部軍管区司令官は「近衛第一師団長は宮内省委託に係る軽井沢宮内省借上御用邸構内に於ける御用横穴式地下壕の設計並に構築に任ずべし。設計の基礎要目は宮内省の要求に拠るべし」（東

部作命第 269 号）という命令を出している。また、善白鉄道の第三トンネルを待避所にする計画もあった。「松代チ号倉庫新築其他工事実施要領」には「善白鉄道癈隧道を利用し松代倉庫の一部として所要の工事を実施するものとす。爾後本工事をチ号倉庫工事と呼称す」とある。敗戦直後、貞明皇太后は 8 月 20 日に軽井沢に行啓している。

なお、本報告の後にイギリスで史料調査をする機会があり、戦時下の軽井沢についてもイギリス側の史料を収集した。“Report on military establishments at Karuizawa”と題された文書には日本から帰国した「ルーマニア」の外交官の話しとして次のように伝わっている。

> ...a small airplane parts factory was established December 1944. Aviation school also established near airport and about half an infantry regiment and half an artillery regiment brought to Karuizawa and housed in wooden barracks. Protesting neutral diplomats led by Spanish Ambassador were told this was only temporary measure. Measures apparently prompted by fear that Allies would land parachutists or gliders on plateau at Karuizawa which is adequate for such operations.

1945 年 5 月 23 日のスタンプがあるこの文書には“Following report graded B3 received from OSS”とある。また、実際の状況とつじつまが合わない部分があり、史料批判を必要とする。

パラシュートに言及している点は興味深い。『木戸幸一日記』（1945 年 7 月 25 日）には「敵は恐く空挺部隊を国内各所に降下せしむることとなるべく、斯くすることにより、チャンス次第にては大本営が捕虜となると云ふが如きことも必しも架空の論とは云へず」という記述がある。

（２）「『昭和天皇実録』と日本の終戦」（日本国際政治学会 2015 年度研究大会、仙台国際センター、2015 年 11 月 1 日）と題して報告を行った。『昭和天皇実録』を論じた先行研究を整理・分類した。

また、本報告では、1945 年の 8 月 21 日に「草薙の剣」が熱田神宮から水無神社に向けて運び出されていたことについても言及した。万が一の襲撃をおそれ、偽物の剣も用意されていたという。

（３）「『聖断』と『終戦』の政治過程」（筒井清忠編『昭和史講義　最新研究でみる戦争への道』筑摩書房、2015 年）を発表した。八月九日のソ連参戦から七日間という短期間に御前会議が二度も行われ、政治家や軍人の大部分は不眠不休の状態におかれた。このような状況の中、昭和天皇の軍部観が降伏を決心した理由の背後に存在していたことを指摘した。本書は英訳され、Kindle などでもダウンロードできる。

（４）「鈴木貫太郎と日本の『終戦』」（黄自進・劉建輝・戸部良一編『「日中戦争」とは何だったのか』ミネルヴァ書房、2017 年）を発表した。先行研究の多くは、首相鈴木貫太郎の「腹芸」の有無に注目してきたが、本論文では「当時の政治・軍事指導者は苦渋の決断を下すうえで、何を判断の基準にしたのか」とした上で、海軍軍人としての側面にも注目した。

また、鈴木貫太郎については、近日中に著書として出版を予定している。

米国で史料調査を行った際には、大正

七年に鈴木貫太郎が練習艦隊司令官として訪米した時の写真などの史料が見つかった。国内の史料調査においても『鈴木貫太郎自伝』の作成過程についての史料がみつかった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計　3　件）

① Tamon Suzuki, “Defining a P.O.W.: The Aftermath of the Otsu Incident,” International Workshop: POW and Civilian Internees From the Viewpoint of East Asia, Cambridge University, March 17, 2018.

②鈴木多聞「第二次世界大戦の和平交渉とスイス」(第１回日瑞学術交流ワークショップ、軽井沢町中央公民館、2015 年 8 月 22 日)

③鈴木多聞「『昭和天皇実録』と日本の終戦」（日本国際政治学会 2015 年度研究大会、仙台国際センター、2015 年 11 月１日）

〔図書〕（計　3　件）

①鈴木多聞「鈴木貫太郎と日本の『終戦』」（黄自進・劉建輝・戸部良一編『「日中戦争」とは何だったのか』ミネルヴァ書房、2017 年、257-286 頁）

② Tamon Suzuki, “Emperor Hirohito’s “Sacred Decisions” and the Political Process of Japan’s Surrender.” In *Fifteen Lectures on Showa Japan*, edited by Kiyotada Tsutsui, 257-275. Tokyo: Japan Publishing Industry Foundation for Culture, 2016.

③鈴木多聞「『聖断』と『終戦』の政治過程」（筒井清忠編『昭和史講義　最新研究でみる戦争への道』筑摩書房、2015 年、247-264 頁）

６．研究組織

(1)研究代表者

鈴木　多聞（SUZUKI, Tamon）
京都大学・白眉センター/法学研究科・特定准教授
研究者番号：70636216